

研究発表要旨

‘Something Special’ 再読

岡野浩史

Iris Murdoch の唯一の短編 ‘Something Special’ については、論じられることが極めて少ないように思われる。この作品は1957年に Macmillan から出された短編集 *Winter's Tales* No.3 に発表されたものの、マードックの死後、1999年に Chatto & Windus から単独の作品として再発行されるまで40年以上も埋もれたままになっていた。日本では1959年に英語の教科書に採用され、英潮社から出されている（筆者未見）。

さらに、1972年には「何か特別なもの」と題した翻訳（丸谷才一訳）が集英社の「現代の世界文学シリーズ」の一つである『イギリス短編24』に所収となっている。しかし、1990年に出た「集英社ギャラリー [世界の文学] 5」の解説において富士川義之氏は、マードックは「短編をまったく書いていない」と断言しており、翻訳が出てからかなりの年数が経過しているにもかかわらず、富士川氏ほどの専門家でも ‘Something Special’ の存

在を知らなかったということになる。

‘Something Special’ がさほどの注目を受けていないのは、埋もれていた期間が長かったということもあるだろうが、何といてもマードックが長編作家として認められていることが最大の要因だろう。彼女の26冊の堂々たる長編小説群に比べれば、この作品は数十ページほどの、文字通り「薄っぺらな」作品である。いかにも取るに足らないものに見えるかもしれない。では、中味まで「薄っぺら」かということ、そうではない。十分に注目に値するものが、そこには存在しているように思われる。

作品の舞台は、Dublin である。24歳の Yvonne Geary は文具店を営む母と二人暮らしで、母とベッドを共有している。貧乏であり、アイルランドからの脱出を夢見ている。彼女には Sam という求婚者がいる。洋服屋に勤めるまじめなユダヤ人だが、イヴォンヌは彼に飽き足りないものを感じている。サムとの結婚には “something special” が欠けているのだ。作品では、ある日の夕方から、深夜まで、イヴォンヌがサムとのデートに出かける前から、彼女が一人きりで自宅に戻ってベッドに入り、結婚の決意を母に告げるまでが描かれる。一読、James Joyce の *Dubliners* 中の諸作品、特に ‘Eveline’ を思い出す読者が多いだろう。しかし、結末部に注目すると ‘Eveline’ との比較よりも ‘The Dead’ との比較の方が作品の解明にはより有効であると思われる。

本発表では、上記のことを指摘した後、まず ‘The Dead’ において、ジョイスの創作概念の一つである epiphany - ‘revelation of the whatness of a thing,’ the moment in which ‘the soul of the commonest object seems to us radiant’ - がどのように使われているかを確認し、そのあと、‘Something Special’ においてはどうかであるかを作品をたどりながら、考えてみた。このとき、特に重要なのが作品の最後の部分にある沈黙の10分あるいは15分である。主人公のイヴォンヌは、この時間に epiphany を経験し、結婚の決意

へと至ると考えると作品の結末の持つ説得力が説明できるように思える。また、読者も最初はその沈黙の時間の意味については宙吊りの状態におかれるが、イヴォンヌが母親に決心を語ったときに、epiphany を経験することになる。

作品中、特に注目すべきものとして、求婚者のサムが ‘something special’ として、イヴォンヌに見せる倒木がある。この緑の葉をつけたままの倒木は様々なことの象徴としてみるのが可能だが、とりわけ、私たちの生が contingent であり、chancy であることを表しているように思われる。サムはこの倒木に美を見だし、その木に上がって小鳥のようになってみようと言う。また、この倒木を ‘sad thing’ だとも言っている。マードックは美について私たちが unselfing するためのものとして極めて重要視している。私たちの生は ‘has no external point’ であり、‘All is vanity’ である。しかし、そのような生であっても私たちは better な人間になるべく good を求め、virtue を求めて生きていかねばならない。マードックはサムに ‘sad thing’ と言わせているだけでなく、結婚を決心したイヴォンヌにも同じ言葉を使わせている。‘sad thing’ の内実についてはかなりの違いがあるが、二人のあいだの隠れた affinity が暗示されているのではないだろうか。不完全極まりない生を受け入れつつ、二人が小鳥のようになってどんな歌を歌うことができるのかはわからない。しかし、二人は前に一歩踏み出すことになったのである。

‘Something Special’ は短編ではあるが、ジョイスの epiphany の概念そしてマードックの道徳観を念頭において読んだとき、さらに豊かな読みを展開してくれるように思われる。

なお、本作品の日本語版に多くの誤訳が、存在することを指摘しておきたい。マードックの作品中、日本で一番読まれていると推測される *The Bell* の日本語版が同一の訳者によるものであることを考えると検証の必要性があるだろう。